

学 会 報 告

TEA研究会 学不可以已（荀子）

伊藤 順一

本年度の秋季TEA（Theoretical Economics and Agriculture）大会は11月18日神戸大学で開催された。前回の神大での開催は阪神・淡路大震災のはるか前、遠い昔の出来事である。懇親会の後、兵庫県出身の原洋之介教授のタクシーに同乗させてもらい、先に降車した先生から1万円を渡されたことが記憶に残っている。確かその1万円は受け取らず、先生にお返ししたはずである。

「TEAのTは東京のTだと思っていた」という関西在住の会員の一言がきっかけとなり、ここ数年、秋季大会は東京以外で開催されることが多くなった。開催校の教官、大学院生にとっては迷惑な話かもしれないが、あまりなじみのない会員同士が顔と名前を一致させるいい機会でもある。

本誌の学会報告では、報告内容が紹介されることが通例のようだが、幸いにもTEA会のホーム・ページ<http://muses.muses.tottori-u.ac.jp/dept/E/wfarm/matsudat/EA.html>（鳥取大学松田敏信先生作成）に、すでに報告要旨が掲載されている。そこでここでは過去の研究会を振り返り、感想を述べたい。

TEA会は日本農業経済学会の個別報告とは違い、報告時間が30～40分と長い。質疑・応答をあわせると50～60分に及ぶから周回準備が必要である。加えてTEA会の伝統かもしれないが、報告の途中でフロアから質問がはいる。会の創設当時は「仮定が間違っているのだから、これ以上報告する必要はない。聴く方も迷惑だから報告を中止せよ」といった意見まで出されたそうである。私はこの逸話を入会時に聞かされていたので、TEA会と政策研の定例研究会だけは、出来る限りの準備をして報告に臨む。また口下手な

ので、フル・ペーパーを作成して配布するようにしている。

最近の若手会員は度胸が座っているのであろう。「さっきまでレジメを作っていました」などと平然と言い放ちながら、意気揚々と報告時間の直前に会場に現れ、緊張した素振りも見せず報告を終える。

しかし、ここには少なくとも2つの問題がある。ひとつは他人の報告を聴かないという態度である。おそらく「自分の研究とは関係ない」というのが彼らの言い訳であろうが、大凡関係のない経済問題など、この世には存在しない。これは経済学者としての常識である。彼らの研究が他の経済問題と本当に無関係であれば、それは取るに足らないテーマであると断言できる。これとよく似ているが、自分の同僚の研究報告は聴くが、それ以外はスキップするという態度である。大学院生に多いが、研究会の報告は学芸会の発表とは違う。経験のある研究者は他人の報告のなかにも新たな研究のシーズがあることを自覚している。

もうひとつは報告直前に完成したレジメやパワー・ポイントのスライドには改善の余地が多く残されているという、これも常識的なものである。口頭報告に限らず、原稿の執筆についても同じことがいえる。レジメやスライドが直前まで完成していなければ、頭のなかも整理されていないから、いい報告などとても覚束ない。泥縄式は通用しないのである。問題意識や論点、結論を要領よく伝えることができなければ、やや酷な表現かもしれないが、報告しないほうが本人のためである。一度ついたマイナス評価を挽回するのは相当に骨の折れる仕事であることを銘記すべきである。

誤解のないように繰り返しておくと、これは今回のTEA会に出席しての感想ではない。著者本人の経験にもとづいているといった方が正確である。今回に限らず、若手会員の報告はどれも素晴らしく、とくに最近は仰ぎ見るような報告も多いというのが偽らざる感想である。